

国際シンポジウム実施報告 少子高齢化と「学び」—アメリカとニュージーランドの教育現場から—

小林 昭文

東北大学大学院教育情報学研究部・教育部 先端教育推進室 (国際共同研究プロジェクト)

平成27年7月18日(土)に教育情報学研究部主催による国際シンポジウムが仙台市の東北大学片平キャンパスで開催された。当日は、教育情報学の教員院生の他、大学や高校で教育に携わる方々や本テーマに関心のある一般の幅広い年齢層の方々が多数参加し、満席の会場には熱気溢れる議論が繰り広げられた。ここでは、シンポジウムを含めた今回の国際共同研究プロジェクトの取組について報告する。

I. プロジェクトの概要

1. 趣旨

教育情報学研究部・教育部では「高等教育のデジタル化、ネットワーク化」をテーマとした国際的な研究交流・研究協力推進のため、外国人研究者との国際シンポジウムを開催し、高等教育関係者のみならず市民に開かれた教養講座として広く当部の研究並びに教育の成果を公開する。

2. 国際シンポジウムの位置づけ

海外の優れた研究者と共同研究を行うことで、少子高齢化社会で教育に関してどのような変化が生じているか、また、インターネットなどのICT活用が進む中で、これからどのような学びが求められているのかについて、日本、アメリカ、ニュージーランドの教育事情を比較しながら議論を交わしていく。

3. 共同研究者の構成

今回は、アメリカのJ. パスコ氏とニュージーランドのA. スコット氏に協力を依頼し、教育情報学の渡部信一郎長の助言指導の下に先端教育推進室の



小林と共同研究を行った。両氏の略歴は下記のとおりである。

J. パスコ氏 (Ph.D.) はアイオワ州立大学教授で、専門は英文学。フルブライト招聘教授として来日し、

平成21～22年日本女子大と津田塾大での指導の他、東大、東北大などで講演。



A. スコット氏 (Ph.D.) は元国立マッセー大学講師で、現在は通信制学校で教員を指導。専門は応用言語学、日本語教育、遠隔教育。東京外国語大学での研修経験もあり、外国語教育や教育政策に詳しい。

II. 実施内容

1. プロジェクトの発足

平成24年度から小林が進めている外部連携による学習交流と学力形成に関する実践研究を更に深めるため、パスコ氏とスコット氏の研究協力を得て、海外の教育現場での事例の収集を行い、文化面心理面からの比較に焦点を当てた。これまで5回のウェブ会議(写真1)を含め事前準備を行ってきた。

国際共同研究プロジェクト期間の日程概要は下記のとおりである。

- 7月15日(水) 来日
- 7月16日(木) 視察交流 (東京・国立博物館)
- 7月17日(金) ワークショップ (東京・聖徳学園)
- 7月18日(土) シンポジウム (仙台・東北大学)
- 7月19日(日) 震災被災地訪問 (松島)
- 7月20日(月) 帰国

2. プレイベント

7月15日から17日まで、東京で研究活動と中高生と教員を対象にした実践交流を行った。

(1) 研究討論

学士会館東北大学東京連絡事務所において、パスコ、スコット、小林はそれぞれの研究経過を確認し、発表に向けての準備を進めた(写真2)。

(2) 研究への指導助言

東京国立博物館の銭谷真美館長(元文科省事務次

官、東北大出身)を訪ねお話を伺う機会を得た(写真3)。パスコ、スコット、小林の研究実績と今回の国際共同研究について説明申し上げ、銭谷氏からは「教育研究は実践に基づくことが大切である。シンポジウムでもそのことが十分伝わるように。」との助言を頂いた。

(3) ワークショップの開催

武蔵野市の私立聖徳学園で中高生を対象に講演(写真4)、模擬授業(写真5)、討論(写真6)を行い、本プロジェクトの「学びの変化」に関わる実践を行った。



写真1. 共同研究者とのウェブ会議



写真2. 研究経過確認



写真3. 館長室にて(中央銭谷氏)



写真4. 高校生へのスピーチ



写真5. 中学生との学習交流



写真6. 高校生との討論

3. シンポジウム

7月18日(土)の午後1時から4時30分まで、東北大学片平北門会館2階の社会連携スペース「エスパス」を会場として国際シンポジウムを行った。

(1) 基調講演

渡部部長の開会挨拶に続き、下記の講演が行われた。

・講演1

Arashi ga oka as Inspiration: Some Comments on Takarazuka, Cross-Cultural Teaching, and Educational Technology for Older Learners

「嵐が丘」とタカラヅカー文化比較から考える学び

英文学が専門のパスコ氏が、日本の大学などでの講義の経験と名作「嵐が丘」のタカラヅカ版の研究を基に現代の情報化社会での学びについて、日米の文化と教育現場の比較も加えながら講演(写真7)。

・講演2

Learning from each other: AKO

ニュージーランド教育の視点:「アコ」(学び合い)

スコット氏は、マオリ語の教育標語 *Manaakitanga, Ako, and Whanaungatanga* を取り上げ、よい関係をつくり、協力しながら、お互いに責任と信頼を持って学ぶニュージーランドの教育を紹介(写真8)。

(2) パネルディスカッション

・日本の教育現場からの報告

今回のプロジェクトの受入協力校聖徳学園の伊藤正徳校長より私立中高一貫校でのICTを活用した教育実践例が報告された。小林からは、教育情報学研究所・教育部の紹介と東京でのイベント概要報告、高校生の英語授業におけるICTを活用した学習交流、学びの変化と学力形成の研究報告がなされた。

・論点の整理と討論

続いて渡部部長により基調講演の内容のまとめと論点の整理が行われ、討論に入った(写真9)。参加者からの鋭い質問も繰り出され、白熱した討論となった(写真10)。討論の結果は次のように大きく6点にまとめられる。

1. インターネットで学ぶことが、生活の中で重要な役割を持つようになってきている。
2. インターネットの学習への活用では、動機づけ、楽しさ、目標設定が不可欠である。ICTツールと学習者は共に進化していく。
3. 学びにおいて、尊重、協調、協力は最大の要因であると言っても過言ではない。
4. 協調的持続可能な社会を築くために若い世代は高齢者の知識や技術を引き継ぐことが大切で、インターネットの役割は大きい。
5. 少子化による学校の生き残り競争が激化する中、オンライン学習への期待は大きい。「ラーニング・コミュニティ」のしっかりした形成が鍵となる。
6. MOOCなどによるオンライン学習の達成者は対面授業と比べ少ないと言われるが、学習方

法の問題として対比させるのではなく、違う役割の学習として捉えるべきである。若者の ICT 活用能力は想像以上に高く、「学び」の未来を切り拓く可能性が秘められている。



写真7. パスコ氏の講演



写真8. スコット氏の講演



写真9. 渡部部長による論点整理



写真10. 会場からの質疑



写真11. 参加者代表よりお礼



写真12. 北村部長補佐閉会挨拶

最後に参加者を代表して仙台市の私立常盤木学園高校の生徒からパスコ氏、スコット氏にお礼と記念品の贈呈があった(写真11)。その後、北村勝朗部長補佐より閉会挨拶があり散会となった(写真12)。

(3) アンケート結果より

本シンポジウムの参加者は、講師2名、部局教員院生33名、教育関係者・一般20名、計55名であった。アンケートは37名分が回収された。結果は下記のとおり。

- 参加者の構成は、女性が2/3を占め(図1)、年齢別(図2)では20代56%、30代50代60代がそれぞれ11%で続いた。居住地(図3)は仙台市内が76%であった。青森、福島、神奈川からの参加者もあった。職業別(図4)では、学生が62%で最多であった。

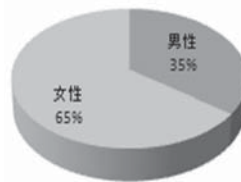


図1. 参加者の性別

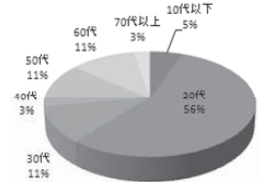


図2. 参加者の年齢

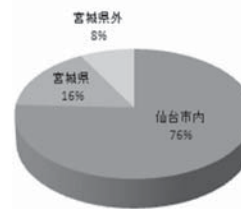


図3. 参加者の居住地

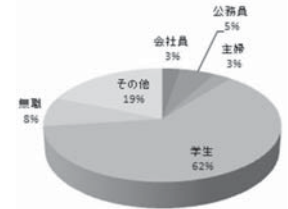


図4. 参加者の職業

- シンポジウムの内容(図5)に関しては、パスコ氏の基調講演1とスコット氏の基調講演2はともに「大いに満足」と「満足」で97.3%を占めた。全体を通じてでは83.8%であった。パネルディスカッションについては、8.1%が「あまり満足していない」と回答している。

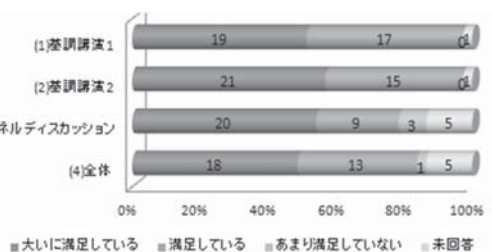


図5. シンポジウムの内容別満足度

- 「基調講演」「パネルディスカッション」「全体」の項目別満足度評価と共に記載された感想は以下のようにまとめられる。

(基調講演1)

「嵐が丘」や「セールスマンの死」など日本でも知られている作品が日米大学生の授業比較の例に用いられていたことで親しみが持てた。また、日本の学生の積極さを引き出すために ICT が活用されていたことは興味深かった。教材で取り上げられた「セールスマンの死」の一場面でのセリフ "Attention must be paid." から高齢者への接し方を考えさせら

れた。Mixerなどのオンライン学習は魅力的であるが、ICTに抵抗感の強い日本の高齢者に如何に利用してもらうか、孤立化を防ぐかが課題。老いても学ぶ大切さに国境はない。

(基調講演2)

ニュージーランドの教育制度がよく理解できた。「学び合い」に関する3つの教育標語が子ども、成人、高齢者全てに生かされ、退職後の幸せ感につながっているのではないかと感じた。高齢者の幸せな生き方のビデオを見て驚いた。退職後のボランティア活動や趣味を楽しんでいる様子を見て、高齢者に対する意識が変化した。しかし、このような充実した生活は全ての層でできているのか、マオリの人々はどうか、老後の生活費は充実しているのかなども知りたかった。

(パネルディスカッション)

日本と欧米のコミュニケーションの違いやオンライン学習と対面授業の相違点が理解でき、「ラーニングコミュニティ」の形成が重要であることが分かった。オンライン学習においても人のつながりは大切である。

ICT活用や英語授業など現場の発表がためになった。これからの教育にヒントを与えてくれる。授業でICTを活用した中高生が高齢者になったときの学びにつながるのかと思う。しかし、社会に出たときに仕事する環境の中でこれらの学校での経験が生かせるのか心配。ICT教育を各世代ごとにプログラムするような系統的な学び方を設計することが大事。

検討課題の整理は明確であった。パスコ、スコット、渡部各氏のやり取りは絶妙であった。渡部氏の質問を更に詰めていけばよかった。

(全体)

このようにグローバルな視点から教育における文化的な違いを比較することは様々な教育の在り方を考えられ有意義だった。国籍や方法が違って、大切にすることは同じだと感じた。パスコ、スコット両氏とも日本語が上手で驚いた。

ICT導入などによる大学改革は急務で、これからの教育の方向を決定していくものだ。高齢者の内団塊の世代以降はICTを社会人のときに経験し、老後もネットやスマホを活用し交流できる。今回は「教育のデジタル化」や「世界の高齢化」を知るこ

とができた。

シンポジウムのコーディネーションがよく出来ていて、少子高齢化、情報化、多様な面から教育について考えることができた。このシンポジウムのようなコミュニケーション活動は重要で、学習者にも役立つものである。しかし、どのような学びの提案につながる研究なのかが見えづらかった。テーマも多すぎたように感じた。タイトルから期待していたような議論は少なく、テーマと内容がかみ合っていない感じもした。

Ⅲ. おわりに

1. 運営を振り返って

(1) 準備・設営

企画、渉外、予算などの実施前の主な準備は平成24年度の教育情報学10周年行事準備に倣い部局の先生方の助言と協力により円滑に進められた(写真17, 18)。また、シンポジウムの会場設営と当日の運営では先生方に加えて院生の皆さんの協力も得て無事開催することができた。

(2) 広報

シンポジウム開催の案内は、学内では各学部・研究科と厚生施設にポスターの掲示を依頼した(写真13)。大学本部のホームページにも紹介され、広く周知されることとなった(<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/2015/07/event20150709-01.html>。写真14)。学外では、近隣の大学と教育施設に呼びかけをお願いした。メディアにも告知の協力を依頼した。NHKテレビ(写真15)、仙台放送インターネット、河北新報、エフエム仙台、せんだい泉エフエム放送で紹介していただいた。東日本放送には当日の様子を取材していただいた。

テレビやホームページで知り連絡してきた方や放送大学宮城学習センター(写真16)でポスターを見て申し込みをされた方もあり、メディアの効果の大きさを改めて感じさせられた。

シンポジウム参加者の情報把握手段(複数回答可)の調査では、「知人からの案内」は70.3%で一番多かった。そのあとポスター・チラシ、ホームページ、テレビと続く。今回は「ロコミ」の威力も大きかった(図6)。



写真13. 大学生協での掲示



写真14. 東北大学HPへの掲載



写真15. NHKひるはびでの告知



写真16. 放送大学での掲示

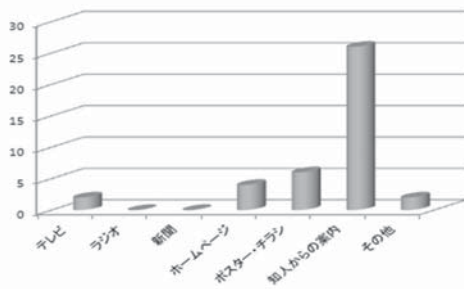


図6. シンポジウム参加者の情報把握手段

2. まとめと課題

本プロジェクトは、ICTを活用して収集された異なった情報を統合し、様々な実践の結果や助言を参考に、背景は異なるが同じ目的でシンポジウムに

集った人々がラーニング・コミュニティを形成し意見交換をしながら新たな学びの可能性を探求するという、本テーマの到達点を見出すために提示されていたプロセスそのものであった。

その学びの過程では、日米大学生の学習行動の違いや高齢者のICTに対する苦手意識やICT活用と関わる孤立化の問題などの文化的心理的要因が作用していることが明らかになった。また、学校、会社、退職後という生涯の流れの中で持続可能な豊かな学びを実現するためには人と人との関係が大きな役割を果たすことと人生の異なる時期を接続した学習設計が重要であることに気づかされた。同時に、社会や時代の必要性からICTには過大な役割が求められていることも危惧される。

本共同研究では、今回のプロジェクトの成果を踏まえ、文化的心理的背景、人間関係において生じる相互作用、社会的時代的必然性の中で、学校と高齢者社会での学びに何が求められよう変化していくのか、更に具体的事例に当たりながら検証を進めていきたい。

謝辞

本プロジェクトを実施するに当たり、手続きや経理の面では教育学部・教育学研究科総務係に、宿舍関係では学生会館（東京）と財務部資産管理課（仙台）に、会場関係では総務企画部広報課に大変お世話になりました。広報関係では、放送局、新聞社な



写真17. 佐藤克美准教授制作のシンポジウムポスター



写真18. 教育情報学研究所・教育部のホームページでの開催報告
<http://www.ei.tohoku.ac.jp/html/news/2015/news150718.html>

どのメディアに催し物告知の協力をしていただきました。貴重な時間を割いてシンポジウムに参加された方々からは研究の参考となるたくさんのご意見ご助言を頂きました。また、東京でのイベント期間中は、東京国立博物館では館長室での懇談の機会を与えていただき、聖徳学園には受入の協力をしていただきました。ここに関係の皆様へ深く感謝申し上げます。有難うございました。